

葉榮鐘における「述史」の志

——晩年期文筆活動試論——

若林正文

はじめに

葉榮鐘（一九〇〇—一九七八）という人がいる。台湾は鹿港の出身である。竹馬の友洪炎秋（一八九九—一九八〇）は、葉の死後、葉の義弟施維堯の求めに応じて次のような墓誌銘を書いた。

葉先生榮鐘字少奇，日據時期畢業東京中央大學，即加入林獻堂翁的民族運動，因中日文都好，曾主持台灣民報等報筆政，任東京支局長。光復後，任職省立台中圖書館指導輔導部等部長；後轉彰化銀行，歷任科長，主任，協理，顧問等職。退休後，從事寫作，出有「台灣民族運動史」等書。新近罹癌逝世，時在民國六十七年



十二月二日，年七十九歲。老友洪炎秋為作銘說：少壯抗日，老寫文章，忽罹癌絕症，竟爾身亡，戚友聞耗，莫不悲傷。豹死皮留，人死名彰，民運一史，可垂無疆
〔洪炎秋 1979: 240〕。

ここに示されている葉榮鐘の生涯の簡潔な記述と同時代を生きた友としてのその評価は、台湾現代史における葉榮鐘理解の原型を語るものといえよう。彼が戦前植民地時期台湾の林獻堂系列の抗日民族運動、つまり林獻堂（一八八一—一九五六）が率いそのパトロン役ともなった抗日民族運動右派の隊列に連なった知識人であって、戦後まだ長期戒厳令施行中の一九六〇年代後半以降に『台湾民族運動史』など一連の著作をあらわして一九二〇年代抗日運動當事者としての経験と記憶を戦後に語り伝えた人物、またそ

のことによって後世に名を残した人物、これが葉榮鐘であるという理解である。

筆者が葉榮鐘を改めてとりあげるのは、もちろんこのすでに定着している理解に異を唱えようというのではない。そうではなくて、その晩年の文筆活動を当時の歴史的コンテキストの中で再検討してみたい。そのことを通じてかつての日本植民地支配とそれへの抵抗という台湾人の歴史的経験が、戦後の国民党一党支配体制という環境の中でどのように論述され、社会の記憶の一部と成っていったのかという経緯の一端を見てみたい。

実は、このような経緯の中の葉榮鐘の姿は、社会学者蕭阿勤が七〇年代「現実回帰」思潮について行った周到な知識社会的論述の中で点描している。この時期の戦後世代知識人や党外民主運動人土による日本植民地統治期台湾政治社会運動の経験への着目と見直しの動き、すなわち、『大学雜誌』における陳少廷（一九三二年生）を先駆とし、ついで康寧祥（一九三八年生）が『台湾政論』などによって推し進め、さらに蔣渭水を顕彰する黃煌雄の言説へと続く動きの中に、葉榮鐘をかつての歴史的経験を伝える書き手として登場させているのである〔蕭阿勤 2008: 285-288〕。

小稿では、蕭阿勤の描くこうした葉榮鐘像に触発されて、一九七〇年代の思潮の現場に葉榮鐘が登場する経緯を

見直してみたい。視点^①を葉榮鐘に移してみても、かつての抗日知識人葉榮鐘は、どのような経緯で、もつと言え、戦後どのような人生を経てそこに居たのだろうか？ これが小稿の問いである。

これは、台湾抗日知識人のポストコロニアルの姿の一端を浮き彫りにしようとする試みの一つでもある。筆者が試みたい葉榮鐘研究をその十全な完成体の形で述べれば、それは葉榮鐘の晩年期も含む戦後の文筆活動の内包と外延との双方を具体的に明らかにすることである。「内包」とは、葉榮鐘の著述内容そのものおよび著述活動に直接関わる社会環境（家族、友人、メディア関係者など）と葉榮鐘との相互作用であり、「外延」とは、彼の著述活動が新たに産み出した人と思想のつながりや波紋（著述を読んで訪ねてくる若者や編集者、新たな発表の場の登場、そして彼らのその後など）である。

一九六六年、葉榮鐘は長年勤めた彰化商業銀行（四八年入行）を定年退職した。一九六〇年代初年に再開された戦後の彼の文筆活動が旺盛に向かうのは退職以後の晩年にあたる十数年であった。そしてこの時期はまた、葉榮鐘とその妻施織織（三一年結婚）にとつては、子供たちが留学し就職し結婚し家庭を為していった時期であり、子供の巣立ちをサポートする人の親としての務めの最後の詰めの時期にもあたっていた。この間日本在住の旧友の息子に嫁いだ

長女葵蓁（一九三二—一九六七）が世を去るという不幸にもみまわれている。未だ長期戒厳令体制が解かれる兆しも現れていない時代において、退職した銀行員であり人の親であり祖父にもなったこのかつての抗日知識人は、その経験をどのように発話していったのか、そして彼が発話して過去の経験・記憶を記述し伝達していったことは次の時代にどのように繋がっていったのか、これらを上記のような方法で問えるだけ問うてみたいのである。

ただし、筆者の史料とデータの収集・解説は始まったばかりであり、現時点で述べることができるとは極めて限られている。例えば、ポストコロナルの文化活動を行った抗日知識人は葉榮鐘に限られないことは言うまでもないが、現時点で筆者が把握できていることは多くない⁴⁾。ここで小稿では、上記の研究企図の第一歩として、次女葉芸芸（一九四五年生）や長男葉光南（一九三八年生）らの整理による葉榮鐘の日記や書簡に依拠しつつ、その随筆集（『半壁書齋隨筆集』、『台湾民族運動史』、そして後に『台湾人物群像』に収められる諸篇などがどのように執筆されたのかを跡づけてみたい。

一 「述史」の志

葉榮鐘が残した日記や家族への書簡などを見ると、歴史

著述への意欲を示すいくつかの記述が見える。葉自身の言葉で分類すると、彼が書こうと意欲したものには、①「台湾政治運動史」ないし「台湾民族運動史」、②「回憶録」ないし「自伝」、③「台湾先賢印象記」ないし「台湾先賢群像」、④「国民党統治下二十五年史」および「日記」、そして⑤「日本統治下之台湾」、があった。これらを総称して（葉榮鐘における）「述史」の志、と呼んでおこう。これらは、自身が関わってきた台湾の同時代史であるから、葉榮鐘の「述史」の志とは、日本植民地統治を経験した抗日知識人の歴史経験の記述と伝達への意欲であったと言つてよい。

父葉榮鐘の全集を編集した葉芸芸は、葉の文筆活動には二つの山があるという。一つは一九三〇年代で、三〇年春東京の中央大学卒業とともに林猷堂に呼び戻されて台湾地方自治聯盟の書記長に任じながら文学雑誌『南音』の同人に参加して評論に健筆を振るい、ついで台湾新民報社に入り社説執筆を担当していた時期である。この時期の葉榮鐘は、台湾近代文学史研究において言及されることが多い。二番目は、前記一九六〇年代以降最晩年に至る時期である【葉芸芸 2000: 14-15】。

葉榮鐘が「述史」の志を最初に記したのは、第一の山の終わりの頃であった。葉の日記の一九三八年八月六日の条には、日本語で次のように記している（送りがな等原文の

まま)。

終生の事業として「台湾政治運動史」を完成せねばならないと痛感する。これは決して今日になって始めて決心したことではない。然し今まで心ばかりアセツテ何一つ準備工作をしてゐないのが恥しい。

この日の朝、台北市内の喫茶店であつて『南音』雑誌同仁だつた楊雲萍(一九〇六一—二〇〇〇)に出会つた。當時、楊雲萍は、三三年日本留学から帰り、定職にはつかなかつたが『先発部隊』『台湾新民報』などを舞台に文筆活動を展開してゐた(楊雲萍年表「林春蘭1995」)。葉榮鐘は楊が「愈々大学の外観をその振舞に現はす」と感じ、内心に自分の不勉強を恥じる気持ちが湧いて心中種々計画を立てるところがあり、その一つとして日記に記したので「台湾政治運動史」であつた。

時に葉榮鐘は三五年末正式に台湾新民報社に入社、通信部長兼論説委員として週一回の日文社説執筆を担当してゐた。一九二〇年代抗日運動の閥歴や当時の職業や社会的位置からして「台湾政治運動史」執筆を意欲するのにふさわしくないわけではなかつた。また、当時、三一年には台湾共産党弾圧とともに台湾文化協会、台湾農民組合など左派抗日運動も壊滅し、三四年九月には二一年から続いていた台湾議會設置請願運動も中止に追い込まれ、三七年七月には葉榮鐘自身が書記長を務めた台湾地方自治聯盟も解散に

追い込まれてゐた。つまり、「台湾政治運動」はとりあえず過去形でしか語れなくなつてゐた。消極的な意味ではあるが、時期的にもふさわしくないわけではなかつた。

この日の日記の前後の時期の日記を読むと、梁啓超の『先秦政治思想史』や『中国歴史研究法』、郭沫若の『中国古代社会研究』、稲葉岩吉『支那近世史講話』、モルガン『古代社会』、ドーンソン『蒙古史』、ベルンハイム『歴史とは何ぞや』などの歴史書をひもといつてゐることがわかる。「台湾政治運動史」執筆が「終生の事業」であれば、これらを読むことは、その準備、助走の一環であつたであろう。しかし、書けなかつた。何故か？

上記引用にもうかがえるが、この頃の日記には自分の学業が中途半端であつたことを悔やむ言及がしばしば現れる。二七年夏からの二度目の留学生生活の中で、葉榮鐘は師と仰ぐべき人としての矢内原忠雄(一八九三—一九六一)を見いだしてゐた。林猷堂の命に従ひ卒業とともに三〇年春台湾に呼び戻されたのは、師とも仰ぎ父とも慕い仕える林との関係において情と理の当然であつても、葉榮鐘としては、おそらく中心いささか不本意のところもあつたと思われるのである。葉榮鐘自身は、こうした学業の「中途半端」を心のどこかで書けない理由としてゐたのかも知れない。だが、結局は時を越えて「述史」の志は果たしてゐるのだから、当時のそういった屈託が決定的な障りで

あったというよりは、外部の厳しい政治環境が、その屈託を克服して「述史」に取り組んでいくことを現実味を帯びた課題とはしなかったのではないかと思われる。

台湾新民報社入社で葉榮鐘自身の社会的地位は上昇かつ安定したと言えるが、台湾新民報社をめぐるとの状況は悪化の一途を辿っていた。葉の新民報社入りの翌三六年六月には林獻堂がその「祖国事件」で侮辱を受けて東京に難を避け、一方新民報社は軍部の目の敵にされて、三七年には日中戦争の勃発に先立つ時期に漢文欄の廃止に追い込まれ、それに輪をかけてように経営不振から社員の給料の二割減俸があった。そして、その後の葉榮鐘の生活は戦争の影響と戦争そのものに強く翻弄されるものとなった。三九年新民報東京支局長として赴任するが、食糧事情が悪化する中で妻が健康を害したため一家挙げて帰台、四一年台中支局長に任ずるが、新民報は当局の圧力を受けて『興南日報』という時局的な紙名に変更を余儀なくされていた。四三年『マニラ華僑日報』編集次長として単身マニラに赴くが、これは日本軍に徴用され大阪毎日新聞特派員の身分で行ったのであった。その任期が終わり何とか無事に帰台すると、『興南新聞』は他紙と統合されて『台湾新報』となり、葉はその文化部長兼経済部長に任ずるが、同年一月に始まった連合軍の空襲が激しくなると、四五年五月台湾新報を辞職して一家を挙げて台中州の田舎に疎開を余

儀なくされ、日本の敗戦を迎えたのであった（葉榮鐘年表「全集九：46-52」）。東京赴任にせよ、マニラ赴任にせよ、空襲にせよ、いずれも運が悪ければ葉榮鐘自身があるいは家族が危難に遭う可能性が高かった。そういう時代であった。「述史」どころではなかった。

さらに、その後の日本の敗戦、植民地支配からの離脱、「祖国復帰」という台湾歴史の大転換も、ただちには「述史」の環境を提供することにはならなかった。

日本の敗戦の報とともに、林獻堂は公共の活動を再開し、それとともに葉榮鐘もまた林の幕僚として身辺慌ただしくなった。「国民政府歡迎準備委員会」の総幹事に任じて台中市の第一回台湾光復節慶祝大会の司会を務めたり、「台湾省海外僑胞」の救援に関して林獻堂とともに陳儀台湾省行政長官などに陳情活動を行ったりした。四六年八月には林獻堂らの「台湾光復致敬団」に加わり、南京、西安などを訪問したりもした。これらの活動に用いられた文書の多くは葉榮鐘の筆になるものであった。林獻堂の活動再開とともに葉榮鐘も元抗日右派の「文胆」（文書幕僚）としての役割を復活させたとも言える。また、親友莊垂勝（字遂性。一八九七—一九六二）が台中図書館長に任命されると、葉榮鐘も同編訳組長兼研究輔導部長に任じ、莊とともに各種文化講座の開催や台中知識人の「談話会」の組織など、台中地域の文化活動の活性化に尽力した（葉

榮鐘年表「全集九：52-54」。

二・二八事件時には、莊垂勝が推されて「台中地区時局處理委員會」の議長となり、台北のそれにならって處理委にいくつかの低位部門が設置されると、葉榮鐘はその宣伝部長となった。しかし、蔣介石派遣の鎮圧軍の接近の情報が飛び交う中で、三月一日夜莊垂勝ら何名かの委員が集まって處理委解散を決めた。葉榮鐘も「二七部隊」を率いる謝雪紅（一九〇一—一九七〇）もその会議に参加していた。「二七部隊」は一二日午後台中での市街戦で市民の犠牲を出すことを避けるため埔里に撤退を決めた「行政院研究二二八事件小組1992:93-94」。当時九歳だった長男葉光南は長じて父の知り合いから、一二日の夜父の声で放送を聞いたと告げられたという。それは、「二七部隊」が埔里に撤退したこと、まもなく国軍部隊が台中市内に進駐してくることを知らせ、市民に落ち着いて対応し決して外出しないことを呼びかけるものだった【葉芸芸2006:354】。

事件後、莊垂勝は憲兵隊に逮捕されたが、奇跡的に一週間後に釈放された。葉榮鐘は逮捕されなかったが、莊とともに図書館の職を免ぜられた。当時台中師範学校校長であった前記洪炎秋も事件に関与したとして免職になった。

莊垂勝の長男林莊生（一九三〇年生。六一年以降カナダ在住）は、莊が釈放された背景の一つとして林獻堂の軍当局への陳情があったとしている【林莊生1992:64-65】。具体

的には判断する資料がないが、葉榮鐘に官憲の手が及ばなかったことについても、何らかの形で林獻堂の政治的保護膜が働いたのかもしれない。ただ、葉芸芸の回憶するところによれば、事件直後何度も田舎に引っ込んで難を避けるように進めた友人があったが、葉榮鐘は肯んじなかったという【葉芸芸2006】。

無職となった葉榮鐘は、翌年林獻堂の斡旋で彰化商業銀行に入った^①。これに前後して、国民政府から台湾省参議会議員に推薦されたが受けず（四七年十二月）、青年党と民社党の合同で監察委員候補に公認された（四八年五月）が受けなかった（葉榮鐘年表「全集九：56-57」）。

以後、中国大陆での内戦の情勢が国民党に不利になるとともに、戒嚴令の施行など台湾の治安体制が強化されていったことは周知の通りである。二・二八事件、そして「白色テロ」は多くの台湾知識人に沈黙を強いたが、葉榮鐘も例外ではなかった。後の引用で述懐しているように、日記すら書かなかった。「述史」どころではなかった。

二 文筆活動の再開と「自伝」

では、葉榮鐘の沈黙はどのように破られ、「述史」の志はどのように果たされていったのか？ まず、これまでに単行本として出版された葉榮鐘の著作の一覧を表1に示す。

葉芸芸によれば、葉榮鐘が二・二八事件後文筆を復活させるきっかけとなったのは、五六年東京に客死した林獻堂を記念する『林獻堂先生紀念集』を編著することであった¹²。この紀念集で葉榮鐘は長編の「林獻堂先生年譜」を作成するとともに、「杖履追隨四十年」を書いている。その後まもなく隨筆をもつようになる、社会的陋習の批判、民俗文化の記録など「隨筆四五万字」を残したのであった〔葉芸芸 2000: 13〕。表に記したように、発表先も当初の文章のほとんどは一般の目には触れにくいと思われる勤務先の『彰銀資料』（月刊）であった（最初のものは一九六二年七月）。六五年三月これらを集めて莊垂勝ゆかりの台中の中央書局から『半路出家集』として刊行されると、文筆家としてもややその名が知られるようになった。

そのためか、その後には一般メディアである『徵信新聞』『聯合報』前身、『出版月刊』、『中華雜誌』などにも文章を求められるようになり、これらは相変わらず『彰銀資料』に書き続けられた隨筆とともに二冊目の隨筆集『小屋大車集』に収められることになった。

『林獻堂紀念集』の編著は、葉榮鐘と林獻堂との関係、林獻堂の傍らで果たした葉榮鐘の役割や位置、そして同世代の中では抜きん出た中文を書く能力、さらには気節を重んじて為さざる処有りかつ出しゃばりを好まないその氣質などの要因から見て、当時葉榮鐘において他の人選はあり

得なかつたと思われる¹⁴。これらはまた後に蔡培火（一八八九—一九八三）、吳三連（二八九九—一九八八）らが葉榮鐘に『台湾民族運動史』執筆を依頼する理由でもあつたと推測できる。蔡培火らの眼中においては、戦後においても葉榮鐘は、かつての抗日右派人士の「永遠の文胆」であつたと言えよう。

後の経緯が示すように、抗日運動右派「先輩」たちの葉へのこのような役割期待と葉自身の「述史」の志とは完全に重なるものではなかつた。蔡培火らにとつては、「文胆」は「文胆」にすぎなかつたかもしれないが、葉榮鐘は書き続けることによつて自立していたのだと言える。だが、何はともあれ、この『林獻堂紀念集』編著の過程で、「暴風雨時期」（後述）の初期に兆した「述史」の志が、実現可能な意欲として蘇つたものと推測されるのである。後にアメリカ留学中の長男葉光南に宛てた六七年六月七日付の手紙で「我決意寫『台灣民族運動史』早在十餘年前就已下決心的」〔全集九：102〕と述べているのがこれを裏付けているだろう。

さて、「自伝」である。このような文筆活動再開から間もない頃、葉光南宛六三年一月八日付の書簡で、葉榮鐘は、「我現在除每期為彰銀資料寫隨筆外、還自撰寫回憶錄、近日寫完一篇抗戰中的生活記錄題為〈半壁書齋由來記〉と「自伝」執筆の意欲と實際の取り組みを記してい

表1 葉榮鐘著単行本一覽

| | | | | |
|-------------|--|-------------|-----------|---|
| 出版年月 | タイトル | 出版地 | 全集 所収巻 | 備考（初出雑誌・新聞など） |
| 一九六五年 三月 | 『半路出家集 （半壁書齋隨筆第一輯）』 | 台中 中央書局 | 四上 | 所収隨筆文末に初出年月のみ記す。全集編者葉芸芸によればほとんどが『彰銀資料』掲載、「一段暴風雨時期的生活記録」のみ『民主評論』（香港）。 |
| 一九六七年 三月 | 『小屋大車集 （半壁書齋隨筆第二輯）』 | 台中 中央書局 | 四下 | 所収隨筆文末に初出年月、初出紙誌名記載無し。内三篇は『徵信新聞』（『聯合報』前身）、ほか、『中華雜誌』『出版月刊』所載が一篇ずつ。その他は『彰銀資料』掲載の可能性が高い。 |
| 一九七一年 九月 | 『台湾民族運動史』 （奥付「著作者 蔡培火、林柏壽、陳逢源、吳三連、葉榮鐘」） | 台北 自立晚報社 | 一上・下 | 『自立晚報』に「日抛時期台湾政治社会運動史」として、一九七〇年四月一日〜七一年一月一〇日の間連載（撰述人）は同前五名、計二七八回、約五〇字。手稿は「日抛下台湾政治社会運動史」（一九七〇年三月一日脱稿）、全集は葉榮鐘名でこの表題で収録。 |
| 一九七七年 八月 | 『美国見聞録』 | 台中 中央書局 | 四上 | 『自立晚報』連載、一部は『彰銀資料』にも。「半壁書齋隨筆」の第三輯に相当。 |
| 一九七九年 六月 | 『三友集』 （蘇薌雨・葉榮鐘・洪炎秋著） | 台中 中央書局 | 四下 | 『国語日報』『彰銀資料』など。洪炎秋の編集と推測される。 |
| 一九八五年 八月 | 『台湾人物群像』 （李南衡編） | 台北 帕米爾書店 | 二 | さらに四篇を加えて、一九九五年再版（葉芸芸・李南衡編、台北・時報文化出版）。 |
| 二〇〇〇年 八月 | 葉芸芸総策劃 『葉榮鐘全集一』 日抛下台湾政治社会運動史上』 | 台中 晨星出版 | | 葉芸芸・藍博洲主編 |
| 二〇〇〇年 八月 | 葉芸芸総策劃 『葉榮鐘全集一』 日抛下台湾政治社会運動史下』 | 台中 晨星出版 | | 葉芸芸・藍博洲主編 |
| 二〇〇〇年 八月 | 葉芸芸総策劃 『葉榮鐘全集二』台湾人物群像』 | 台中 晨星出版 | | 葉芸芸主編 |

| | | | | |
|--------------|------------------------------------|------------|--|--|
| 二〇〇〇年 八月 | 葉芸芸総策劃 『葉榮鐘全集三 日抛下台湾大事年表』 | 台中 晨星出版 | | 葉芸芸・藍博洲主編 |
| 二〇〇〇年 一二月 | 葉芸芸総策劃 『葉榮鐘全集四 半壁書齋隨筆上』 | 台中 晨星出版 | | 葉芸芸主編 |
| 二〇〇〇年 一二月 | 葉芸芸総策劃 『葉榮鐘全集四 半壁書齋隨筆下』 | 台中 晨星出版 | | 葉芸芸主編 |
| 二〇〇〇年 一二月 | 葉芸芸総策劃 『葉榮鐘全集五 少奇吟草』 | 台中 晨星出版 | | 葉芸芸主編、林瑞明校訂。生前自身が「少奇吟草」と題して詩稿を整理。死後未整理の晩年の詩稿も含めて遺族が編集して七九年に刊行、知友に配布。全集収録・公刊に際して、当時時局の關係で未収録であった「哀哀美麗島」（一九六一年五月二三日作）と「無題」（一九七八年作）を収録。 |
| 二〇〇二年 三月 | 葉芸芸総策劃 『葉榮鐘全集六 葉榮鐘日記上』 | 台中 晨星出版 | | 葉光南・葉芸芸主編 |
| 二〇〇二年 三月 | 葉芸芸総策劃 『葉榮鐘全集六 葉榮鐘日記下』 | 台中 晨星出版 | | 葉光南・葉芸芸主編 |
| 二〇〇二年 三月 | 葉芸芸総策劃 『葉榮鐘全集七 葉榮鐘早年文集』 | 台中 晨星出版 | | 葉芸芸・陳昭瑛主編 |
| 二〇〇二年 三月 | 葉芸芸総策劃 『葉榮鐘全集八 近代台湾金融經濟 發展史』 | 台中 晨星出版 | | 徐振國主編。原題『彰化銀行六十年史』。 |
| 二〇〇二年 三月 | 葉芸芸総策劃 『葉榮鐘全集九 葉榮鐘年表』 | 台中 晨星出版 | | 葉光南・葉芸芸主編。在米子女（葉光南・葉芸芸）への書簡、徐復觀・王詩琅・洪炎秋・黃得時・葉光南の追悼・回想文も収録。 |

出所…若林正文作成

る「全集九・80」。この〈半壁書齋由來記〉は、翌六四年八月三十一日に同じく長男宛の手紙の記述から、台中での外省人の友人徐復観（東海大学教授。一九〇三—一九八二）の紹介で徐自身が主宰する香港の『民主評論』（六四年一月号）に「一段暴風雨時期的生活記録」と題して掲載された文章であることがわかる。

同日付け書簡では「自伝」について、さらに(a)出生から一八、九歳の頃までのことはすでに書いた、(b)「光復前後」（一九四一—四六年）について約二・五万字を書き、丘念台（一八九四—一九六七）に送って発表可能かどうか見て貰っている、(c)今後一九二〇年から三五年の部分の暇を見て書かなければならない、との趣旨を記している。(b)は、『民主評論』の六四年一二月号に「台湾省光復前後の回憶」と題して掲載され、生前に前記の『小屋大車集』に収められた。(a)も確かに書かれていて、没後「葉榮鐘先生回憶録」と題して『文季』第一卷三期（一九八三年九月）に掲載され、さらに李南衡（一九四〇年生）の編集で『台湾人物群像』（一九八五年）に収録された。(c)は独立のものとしては書かれなかったようだ。だが、一九二〇—三五年はちょうど葉榮鐘が林猷堂に追隨して台湾議會設置運動、台湾地方自治聯盟などの政治運動に参加した時期にあたる。(c)にあたるものは、その林猷堂についての回憶や『台湾民族運動史』の記述に浴け込まされているものとい

えよう。⁽¹⁵⁾この書簡で触れられていないのは、二・二八事件以後の時期についてである。

三 「台湾先賢印象記」

一九六四年七月一四日付の葉光南宛の書簡では、葉榮鐘の「述史」の三段階の計画が述べられている。親友莊垂勝の長男林莊生の勧めに促されたのである。曰く、

莊生日昨來信勸我用錄音保管我的講演…關於台灣政治解放運動的經過，云分十次錄音，每次一小時半，共要十五小時，寫一本《台灣民族運動史》。我本有此計劃，唯資料尚未集齊故未動手。而且在這以前擬寫完一本《台灣先賢印象記》，把過去民族運動之重要角色描寫一下。現在已寫就六、七人，再加六、七人便可成書。

這書出後應趕寫我的自傳，現已寫成三分之一。這兩書完成後才可著手寫民族運動史。（「家書」〔全集九・87〕）

これによれば、第一段階は一九二〇年代抗日民族運動重要人物の事跡を論じるもので、この時点ですでに書き上げているとされる「六、七人」とは、林猷堂、莊垂勝、高天成、羅萬俤などが含まれるものと考えられ、「さらに加える六、七人」の範囲は不明だが、その後死去までに公刊している文章には、林呈祿、蔡恵如、林幼春、蔣渭水、楊肇

嘉、施家本についてのものがあり、未刊稿として死後に發表されたものに頼和、丘念台、呉三連についてのものなどがある。¹⁶⁾第二段階の「自伝」についてはすでに触れた。「すでに書いた三分の一」とは、前記引用中の〈半壁書齋由來記〉を指すものである。

そして、これらを書き終え刊行してから「民族運動史」に着手するというわけであるが、周知のように、現実にはこのような順番にはならず、「自伝」は形式的には完成されることはなく、第三段階の「民族運動史」が先に書かれ刊行され、第一段階と考えられていた部分は、『台湾人物群像』としてその死後に、葉榮鐘がこれらを書いて経験を伝えたいと考えていたその世代の文化人（李南衡、一九四〇年生）によってまとめられ刊行されたのであった。

ところで、何故台湾人の歴史を書くのか？ 二つの記述を見いだすことができる。一つは、六四年八月三十一日付の葉光南への手紙の一節である。

台湾人因過去五十年間的歷史關係，一般人對於國文的力量較差，致受輕視而吃大虧。但我有自信，台人之才能絕不弱於任何民族，若能努力從事定有可觀。余現在不以老朽自棄，而孳孳以寫作爲念者，第一是欲留一點記錄性文字以供將來修史者之參考；另一點是不願被人歧視台人爲不學無術之士包子。（「家書」〔全集九：89〕）

記録を残し将来の参考に供する、そして台湾人が他に劣らない文化能力を持っていることを証明する、この二つが「述史」の理由である。前者については、葉榮鐘は一年以上後の林莊生宛ての手紙（六五年一月二三日）にさらに言葉を残している。曰く、

日本統治下の台湾解放運動，從結果看來，沒有一件是成功。但對當時的民眾，尤其是知識階級喚起當仁不讓之精神，確實起了作用。如果人類的文化不以現實之成敗做準則，而以提升的精神水準來衡量，那麼，當時的運動是有一定的歷史地位。孔子、基督、釋迦之努力，以近日之狀況看來顯然是失敗，但歷史不能無視這些先賢的精神。我對記錄當時爭取自由之過程，感到一種使命感，而願意從這個觀點去寫台灣之民族運動史。

〔林莊生 1992: 241（原文日本語、未見）〕

さらに、葉榮鐘は一九六四年に書いた「素居滿興四續」と題する詩の中で歴史記憶の伝達についての使命感を表明している（『少奇吟草』〔全集五：229〕）。

先賢幾輩已歸休

餘緒誰能繼末流

幽德闡揚後死責

勉揮秃筆寫從頭

何故書くのか？ 政治上の勝者にあらざる台湾人にも歴史があり時代に伍して闘う精神があった。その精神こそ

伝えなければならない。「述史」に取り組むのはそのためである。それはまた広く台湾社会全体に向かつては、台湾人の歴史と文化の対等とへの承認を強く求めることでもあった。これこそ康寧祥、黃煌雄ら戦後世代が引き継ぐことを意欲しかつ七〇年代の公共空間に発話していった精神であった。

四 「台湾政治運動史」

さて、前記三段階の「述史」計画最終段階の「台湾政治運動史」である。葉榮鐘自身のもくろみと異なつて、前記のようにこの段階が前倒しになつたのは、二〇年代抗日運動右派の「先輩」たちの中の内紛であつた。一九六七年五月一日付葉光南宛の手紙には次の一節がある。

最近肇嘉伯出版《楊肇嘉回憶錄》，因内中對其養父批評太過火，又吹牛吹得太離譜，致受各方面反感，引起軒然大波。這是好名之累的實例。因其回憶錄風波的影響，受蔡培火、吳三連兩先輩的慫恿寫《台灣民族運動史》。現在正著手籌備，初步預定明年出書。【全集九…1011】

六七年元旦から再開された日記の記述を見ると、盛んに歴史書を読み始めていることがわかる。元旦から『四書読本』を読み始め、翌日には『歴史よもやま話』(上・

下巻)⁽¹⁸⁾を開始して一二日読了。一〇日注文してあつた井上清『日本の歴史』(上・中・下巻)⁽¹⁹⁾が届いて、二月四日読了、三月一九日からは要点的抜き書きを始めて五月二〇日終了。三月から四月にかけては梁啓超『中国歴史研究法補編』、黎東方『細説元朝』、同『細説民国』(いずれも上・下巻)に目を通してゐる。三八年日記に初めて「述史」の志を記した時に似ている。葉榮鐘自身すでに本格的助走を始めていたのである。この頃、王詩琅に頼まれて『台湾青年』の総目録の作成に取りかかり(三月二〇日開始)『台湾風物』に投稿しているが、これも助走の一環になつていったといえるだろう。そんな最中に『楊肇嘉回憶錄』(台北・三民書局、一九六七年)の件が起こつた。

四月一二日葉榮鐘は蔡培火からの手紙を受け取る。それは予期に違わず楊肇嘉の回想録問題だつた【全集六上…293】。さらに二五日蔡からこの件の相談のため来北を促す速達が届き、葉榮鐘は五月二日国賓大飯店で蔡培火、吳三連と昼食を共にした【同前：295、297】。葉榮鐘による『台湾民族運動史』執筆の件は、この時に大筋が決まつたのであろう。同月七日の日記には、楊肇嘉の弟が豊原で記者会見して『楊肇嘉回憶錄』を攻撃して新聞で報道されたこととともに、『台湾民族運動史』漸次構成腹稿」との記載がある。また、その後の日記には、この件について蔡培火から陳逢源の同意を取り付けたこと(九日)、吳三連から葉

榮鐘への執筆経費の支給の件が提案されたこと（二三日）の記述があり、そして、ついに二七日には執筆の直接の準備として年表作成を開始したことが記されている【同前：298-303】。また、九月には重要参考資料となる『台湾総督府警察沿革誌第二編 領台以後の治安状況（中巻）台湾社会運動史』を確保することに成功している。

年表の草稿が完成したのは、一〇月三日だった（同日日記【同前：331】）。しかし、ただちには『台湾民族運動史』の執筆には取り組めなかった。東京に嫁いだ長女の死である。長女蔡秦は二人の子供の育児に加えて住居新築と引越の過労で六月から寝込み、七月に入ると熱が引かなくなり入院、心臓弁膜症と診断され、肺炎も併発、九月には一時持ち直したが、一〇月一三日最後の息を引き取った【葉榮鐘 1979: 202-207】。葉榮鐘は家族を支えなければならなかった。アメリカ留学中の長男は博士論文資格試験を控え、次女は実践家政専科学校に進学したばかりだった。崩れがちになる次男葉蔚南（一九五〇年生）の勉学の意志にも気を回さねばならなかった。妻は悲嘆に暮れていた。いったん落ち着いても知友が慰めに来るたびに悲しみはぶり返し、涙にくれる。自身の心の整理も必要だった。一月一〇日長編随筆「秦児最後の信」を書き始め、一二月九日書き終えた【全集六上：347】。長女病重篤の報に接している時期に葉榮鐘が家族にキリスト教入信を告げているこ

とも、この時の葉榮鐘の心境を示す事柄として付け加えておく必要があるだろう。

そして、一月一日清書されてきた「年表」の校訂作業に手をつけ（一三日終了）、年を越してようやく執筆が始まる。日記六八年一月七日の条には「目次」を書いた、とあり、一五日の条には第一章「台湾民族運動之濫觴」の「台湾同化会」の部分一千字を書き終えた、とある【同前：354-356】。以後の経緯を長男宛の手紙の記述で追うと、三月二七日の手紙ではすでに第一章を脱稿して、蔡培火と呉三連の校閲に回したとあり、四月一二日第二章「六三法撤廃運動」一万五千字を脱稿、次週蔡培火に校閲に出す（一三日付書簡）、五月二六日第三章脱稿（二五日付書簡）とある。さらに、翌六九年九月二一日付書簡ではすでに第七章を脱稿し、第八章の三分の一を終えていることを記し、七〇年元旦の書簡では、第九章も脱稿しあと一章を残すのみとなり、草稿を書き終えてから再度見直しを行い、その後「自立晩報」に連載、連載終了後単行本刊行の運びとなっていることを報告している。この手紙では一月中に脱稿のつもりであると言っているが、実際には草稿脱稿は三月一一日であった（一三日付書簡、同日付日記）。

「年表」作成を執筆の直接的準備作業であったとすれば、それには六七年五月二七日から同年一月一三日の足かけ六か月、「目次」作成を執筆開始とすれば、本格的執

筆作業は六八年一月七日から七〇年三月一日までの二年二か月かかった。「年表」作成と合わせれば合計二年と八か月の時間を費やしたのであった。この間、葉榮鐘夫妻は長女の死に遭ったが、六五年林妙芬と結婚した長男葉光南には六八年初孫が生まれ、さらに葉光南は翌年米ジョージア州立大学から化学の博士学位を取得し夫妻を喜ばせた。七〇年草稿脱稿後であるが、次女葉芸芸は実践家政専科学校を卒業、この頃には翌年結婚する東海大学助手陳文典との交際が始まっていた。八月には次男葉蔚南が世界新聞専科学校に合格した。葉榮鐘は、長女を異郷に失うという痛手を受けながらも、自身の代表作の著述とともに、人の親としての最終段階の務めをも見事に果たしつつあったのである。

『自立晚報』に連載開始は当初三月二〇日の予定だったが、実際には四月一日となった(同日付日記)。そして、翌七一年一月一〇日連載を終了した。単行本は『台湾民族運動史』と題して刊行された。奥付の刊行日付は同年九月となっているが、日記によれば葉榮鐘が同書を受け取ったのは一月八日であった。

かくして、その「述史」の志の中核部分は果たされたことになるが、葉榮鐘にとつては不本意な部分、そして憤慨の種となる事柄もあった。原因は蔡培火であった。第一に、『自立晚報』連載に際して、蔡培火の主張で、蔡培

火、林柏壽、陳逢源、吳三連、葉榮鐘の五名の共同編集とされ、表題は「日抛時期台湾政治社会運動史」と変更された(葉光南宛書簡、七〇年三月二十八日[全集九:113])。第二に、単行本では表題は元に戻ったが、葉榮鐘の反対は容れられず、押し切られて結局上記五名が執筆者として名を連ねる形とされた。第三に、単行本の「序」には、五名が共同で資料収集や執筆方針を決め、「葉榮鐘君が初稿を執筆した」とされたが、この「初稿」の二文字は葉榮鐘の原稿にはなく、葉榮鐘の承諾なく蔡培火によって最後に書き加えられたものだった(日記七一年一月八日[全集九:691])。第四に、『自立晚報』掲載にあたり校閲した蔡培火と同紙編集者により多くの削除、訂正、書き込みなどがなされて、「與本来面目大不相同」となってしまった(葉光南宛書簡、七一年一月五日[全集九:113])。第一点も第二点も葉榮鐘は不満を忍んで結局受け入れた。その理由を、七一年二月二日、長男に次のように述べている。

出書事因有種種顧慮不便破裂，第一是多年同志不認到這麼大的年紀弄到不歡而散。第二是台灣最慘就是不能團結，現在為此鬧翻恐要被人笑話。第三林柏壽是好人，他參加是出自善意的，一旦破裂深恐使他蒙受池魚之殃，是故自己委屈息事寧人為得策也。[全集九:118]

118]

だが、第三点は我慢できなかった。葉榮鐘は自立晩報に對して抗議書を出すとともに、蔡培火宛「絶交書」（全集一に所収）を認めた。一月一日に筆を執り推敲を繰り返して一七日は中央書局の張耀錡に見せ、この日付で決定稿とし、タイプにまで出した。しかし、二〇日タイプ屋から回収して結局投函しなかった。妻施織織が賛成しなかったからであった（日記「全集六下：693-694」）。葉芸芸によれば、施織織の説得は次のようなものであったという。

母親認為出版著作權一事之所以不能達成協議，不只是蔡培火一個人的堅持，吳三連的態度可能更為關鍵。而蔡、吳兩位皆為父親多年同志且是前輩，為著作權事而破裂，實在令人遺憾。因此她勸父親擱下此事把精力投入新的寫作。²⁶

戦前抗日運動期の先輩・後輩という人間関係は戦後にも尾を引き、さらに片や元行政院政務委員にして中華民國赤十字会長（蔡培火）と元台北市長にして自立晩報発行人、「台南幫」の重要人物（吳三連）、片や一介の退職銀行員、という現実の力関係があった。葉榮鐘としては結局再度憤懣を腹の中に飲み込むしかなかった。妻施織織は、本人よりも、抗日運動のポストコロニアルの人脈の中に置かれてある夫の位置をよく知っていたというべきか、あるいは、妻として夫が腹ではわかっていることを明白にやってやった

というべきか。いずれにせよ、おそらく夫妻の選択は正しかった。

五 「日記」と「国民党統治下二十五年史」

一九六六年元旦、葉榮鐘は日記の冒頭に日本語でこう記している、否、これから「日記」をつけることを自らに宣言している。

私は十数歳の時から日記をつける必要を認めて来た。事実今まで数知れず日記を買って書いて見たが、いずれも永續きせず、中途でやめてしまった。ついに己れの恒心なきことを恥^マち^マって自からその念頭を抑へて来たやうな始末になった。然し台湾光復以来、殊に二二八事変からこの方十七八年間は意識的に日記をつけることを避けてきた。それは庸人自擾の結果になることを恐れたからだ。現在私の歳はずでに六十を疾くに過ぎ、最早や老朽にして人の注目を引かない存在になったから仮へ日記に面白くない事書いても多分老朽の故を以て見逃して呉れると思ふ。これは一種の自己瞞着かも知れないが一応この甘い見透しの下に再びこの日記をつけることにした。²⁷

ここに言う日記は一般的意味の日記ではなく、葉榮鐘独自の意義が付されたものである。日々の備忘録くらいのもの

のであれば、六六年以前も実は日記はつけていたのである。家族の寄贈になる清華大学図書館蔵「葉榮鐘全集、文書及文庫珍藏資料」を見ると、二・二八事件のあった一九四七年から五四四年の八年間の日記は所蔵されず、この間は確かに全く日記をつけなかったものと思われる。しかし、その後は一九五六年（林獻堂が死去した年である）と五八年二月〜一二月を除いて、中断はあるもののビジネス用の手帳にメモ風の日記が六五年まで記されているのである。そして、六六年は前記引用を含む年初三日間のみ日本語で専用の日記帳に記されてその後を全く欠く。この年葉榮鐘は彰化銀行を退職、そして、翌年元旦からは、七七年六月末から年末まで癌のため入院中の期間を除いて、七八年癌再発で再入院するまで、七四年の訪米・訪日中も休むことなく日記が記され続けている（『葉榮鐘全集』はこれを「退休生涯」として第六巻の中にまとめている）。だが、それも六五年までと同様の基本的にはメモ風の覚書程度のものであり、六五年までのスタイルが踏襲されているのである。

したがって、ここに言う「日記」とは、葉榮鐘の通例のスタイルの日記ではなく、「二二八事変からこの方十七八年間は意識的に」書くことを避けてきた、書けば「庸人自擾の結果になる」可能性のある事柄を含む記述を指すことになる。つまり、この年年頭にあたり葉榮鐘は、政治的に敏感な内容を記すことのできる新たなスタイルの「日記」を日本語で書くことに挑戦しようとしたのであった。しかし、続かなかつた。以後一月三日までの日記も家族の動向と家庭の経済状況の覚書程度のもので記されるだけであった。何故すぐに止めたのか、よくわからない。

しかし、このような試みがあつたということは、前記「自伝」の計画の中には示されていないかつた二・二八事件後の同時代史執筆にも葉榮鐘は意欲を持ち続けていたことを示すと思われる。それが確認できるのが、一九七一年一月一〇日の日記の次のような記述である。

近日頗思寫一本國民黨統治下の二十五年史、但茲事體大、一個人之力恐不勝任。「全集六下：615」

この日は、ちょうど前年四月一日から『自立晚報』に連載されていた「日抛下台湾政治社会運動史」の連載終了の日でもあつた。一仕事終えて次を思ったところであるが、その前年が台湾光復二十五周年であつたことが一つの感慨を葉榮鐘に与えていたようだ。台湾の歴史的記念日、したがって政治的に敏感でもある日付の日記に何らかの関連記述がないかどうか、「退休生涯」の日記についてチェックしてみると、二月二八日、六月一七日（台湾総督府始政記念日）、八月一五日、九月三日（対日抗戦勝利記念日）についてはそれぞれの日の日記には一切関連記述はなく、一〇月二五日（光復節）については、一九七〇年に

なつて突如記述が現れ、翌七一年にも現れる（その後はなし）。前者は、「昨夜臨睡作新体詩一首十月二十五日感想」として、次の詩が記されている〔全集六上：584〕。

但願這是一场惡夢

一覺醒來月白風清

無恥與殘虐隨風消失

歧視與壓迫化於無形

憤怒不再動我的心火

醜惡不再污我的眼睛

啊！二十五年的惡夢

翌七一年同日には、「晚成（十月廿五日）七絶一首」として次の詩が記されている〔全集六下：688〕。

年年此日最傷神

追悔空教白髮新

送虎迎狼緣底事

可堪再度作愚民

公開の文章では「光復」の語をもちろん使用しているが、日記のこの二条の記述では明らかに「光復」の語を意図的に避けている。葉榮鐘は、一九四五年、まもなく終わろうとしていることが明白な日本植民地統治下の最後の日々に生まれた次女の幼名を「光復」と名付けた（葉榮鐘「台湾省光復前後の記憶」〔全集二：432〕）。だが、二・二八事件後には一〇月二五日を「年年此日最傷神」と感じざる

を得なかった。そのような歳月の「二十五年的惡夢」に処する途の一つが、葉にとつては「國民黨統治下の二十五年史」を書くことであると観念されたものと推測される。

翌七二年、葉榮鐘はまた「十月二十五日」と題する二首の七言絶句を作つてゐる（『少奇吟草』〔全集五：239-240〕。ただし日記には掲載なし）。

〈其一〉

送狼送虎一番新

狼說同胞骨肉親

軟騙強施雖有異

後先媲美是愚民

〈其二〉

鑄成大錯豈無因

畢竟權宜誤我民

悔禍天心猶未晚

解鈴賴端繫鈴人

七〇年代を振り返ると、七一年の光復節の同日に台湾の中華民国は国連のメンバーシップを失い、ついで七二年春には米ニクソン大統領の訪中と「上海コミュニケ」の発表があり、台湾を巡る国際環境はにわか悪化していた。もし上記の〈其二〉、特に後半の二行が、この国際環境激変に対する葉榮鐘の反応とそれに際しての国民党統治階層の反省への期待を反映しているものとすれば、彼の「國民黨

統治下の二十五年史」への意欲も増していたのかも知れない。七三年一月五日の日記にはさらに「一段暴風雨時期之生活記録」に続くものを書きたいとの意欲が記されている〔全集六下・878〕。つまるところ、葉榮鐘は「台湾民族運動史」に加えるところの、戦後を含めて自分が生きたすべての期間の同時代史を意欲していたのである。残された時間は長くなかった。結局、「國民黨統治下の二十五年史」は、日本語で日本で出版を目指すこととされた前記「日本統治下の台湾」²⁸とともに筆が起こされることはなかった。だが、「國民黨統治下の二十五年史」への意欲の表明は、葉榮鐘の「述史」の志の強さとともに、それが「日本統治下」の台湾人の精神への承認の要求にとどまるものでなく、「国民党統治下」をも貫く承認の要求であったことを示している。

六 葉榮鐘と青年たち

——受け継がれる記憶——

前述のように、葉榮鐘は『台湾民族運動史』執筆・出版に関わる憤懣を自分で飲み込むしかなかった。それでも、「述史」の志は成った。そして、葉榮鐘の我慢には報酬があった。第一に、本の売れ行きは悪くなかった模様である。左派抗日運動に関する記述が極めて少ないことに、か

つての関係者は不満であったかも知れない。²⁹それでも、このような書物が、戒厳令下で著され出版されたこと自体が一つの「事件」であったと言えるのであり、また巷間に流布する類書が少なかったことも幸いしたであろう。具体的な販売冊数は不明だが、『台湾民族運動史』は発行した年に二刷（二版）³⁰まで行き、著者の死後にも順調に増刷を続けていったのであった。

第二に、時とともに、海外からも、台湾内からも手応えのある反応が葉榮鐘に届いた。台湾をめぐる国際情勢はすでに急雲を告げており、戦後世代の自己主張（蕭阿勤の言う「現実回帰」の思潮）もまもなく明確な形を取ろうとしていた。地方選挙の中に命脈を保っていた「党外」人士の国民党批判の声もまもなく「中央民意代表增加定員選挙」という新たな政治競争の空間を得て要求鮮明な民主化運動として立ち現れて来るであろう。こうした中で、『台湾民族運動史』は静かに注目を集め始めたと言えるのである。海外の反応とは、とりあえず在米台湾人、在日台湾人からの反応であったが、後者に関しては、在日学者の戴國輝が主宰する台湾近現代史研究会へと発展する動きに繋がっていった。³¹

台湾内では直近の知友から好評を得たばかりでなく、³²戦後世代からも手応えのある反応があった。葉榮鐘日記の七〇年代前半部分には、陳少廷、康寧祥、李南衡といった七

○年代「現実回帰」思潮や党外民主運動の担い手が葉榮鐘にアプローチする状況がうかがわれ、七〇年代後半になると、彼らよりさらに若い世代、すなわち美麗島事件以後の台湾史再解釈が進められる時期の書き手、さらには八〇年代後半以降の台湾研究・台湾史研究の高まりの担い手となっていく学者たちの名前が散見するようになる。比較的早い時期が盧修一（七三年七月九日）、その後林載爵（七五年一月三日）、簡炯仁（七五年七月三日）、林瑞明（七七年一月五日）、吳乃德（七七年二月二〇日）、張炎憲（七八年八月一日）などである。当時大学生・大学院生であったこれらの人々があるいは『台湾民族運動史』を読んで、あるいはおそらく『台湾政論』掲載の台湾人物論を読んで、葉榮鐘を訪ねてきたのである。

こうした当時の学者・知識人の卵たちと葉榮鐘との交流に関して論ずるには、現時点ではあまりに材料が足りない。葉榮鐘日記は来訪者の名前以外多くを記さない³⁴。また、来訪者たちも、李南衡を除いて回想などを未だ発表していない³⁵。そこで、ここでは、七〇年代において葉榮鐘とのインタラクティブにおいて、抗日歴史の見直しに関する行動においても、最も突出していると考えられる戦後世代の人物である康寧祥との交流について簡単に触れるに留めておきたい³⁶。

蕭阿勤は、康寧祥へのインタビューに基づいて、康寧祥

が自身の成長の環境の関係で政治に関わる以前から日本植民地時期を知る「老世代の台湾人知識人」と知り合っており、その経歴談を耳にするとともに、植民地期の歴史に関する文献にも接していたとしている【蕭阿勤 2008: 285】。ここに言う「老世代の台湾人知識人」の筆頭に挙げるべきは、王詩琅である。康寧祥の台北市萬華の自宅は王詩琅の自宅とは建物の背面で隣同士であり、簡単に往来できた。

一方、葉榮鐘日記の記述によれば、退職後の晩年期、葉榮鐘はほぼ一か月に一度は来北し、その折りには、洪炎秋、黃得時、王詩琅、丁瑞魚（一九〇一—一九七三）といった台北在住の友人と語り会うのが常であった。また、これらの友人が中部を訪れば、かならず葉榮鐘に連絡を取り顔を合わせていた。彼らの台北でのお気に入りのレストランは延平北路の洋食屋「ボレロ」であり、台中ではまぐず中央書局で落ち合うのが通例だった。これらは、蔡培火、吳三連、陳逢源といった抗日運動「先輩」との関係とは異なる全く気の置けない友人同士の交遊であった。

日記に康寧祥が初めて登場するのは、七四年一月八日である。葉榮鐘は妻の抜歯のため数日前から台北に滞在していた³⁷。この日の朝、王詩琅が康寧祥を伴って宿舎を訪れ朝食をとりにしたのであった【全集六下：927】。康寧祥と王詩琅の上記のような関係、王詩琅と葉榮鐘の会合の頻度から考えて、この時が葉と康の初対面ではなかったのかも

しれない。

その後の日記の記述では死去までに、一回の台北ないし台中での会見が記録されている。最後となる七八年五月五日の会見は、康寧祥が姚嘉文、王拓、および陳宏正（待査）を伴って台中の自宅を訪問している〔全集六下・1186〕。この他に、七六年一月二八日には康寧祥の紹介を受けているとして八名の青年（名前の記載なし）が訪ねてきた。いずれも葉の『台湾民族運動史』やその他の文章を読んでおり、葉は日記に「他們可以說是有心人也、近來年青人漸注意日本統治時期的事情實屬可喜」と記している〔同前：1120〕。

その康寧祥は、一九七五年三月立法院で質問に立ち、蔣經國行政院長に対して台湾歴史の尊重について訴えている。康は、鄭成功が台湾を「反清復明」の基地としたことから始まって、一九世紀末の日本の占領に際しての武装抵抗までを公定中国ナショナリズムのモデルに従って回顧した後、第一次大戦後ウィルソン米大統領の民族自決論、中国の五四運動などの影響を受けて台湾では「台湾文化協会」〔台湾議會設置請願運動〕「台湾民衆党」〔台湾地方自治聯盟〕などの抗日運動が行われたことを強調し、台湾同胞が日本の植民地支配下で払った犠牲と受けた苦痛は「大陸同胞の八年の抗戦の苦しみに勝るとも劣らない」、当時の抗日人士の「祖国を思う志」こそ抗日の最大のよりどころであつた、と論じた。そして、台湾人民の抗日史もまた「中華民國歴史文化の貴重な財産」であるとして、歴史教科書に書き入れ、本省人の学生に台湾の先人が「祖国と民族の尊厳に思いを馳せた」実績を知らしめるべきであると要求したのであつた。蔣経國は、「台湾・澎湖同胞の愛国実績を教科書に編入し」、それにより青年学生がよりいっそう「反共復国の神聖な任務」を負えるようにすることには「非常に賛成」と応じた〔若林 2008: 151、蕭阿勳 2008: 279-281〕。康寧祥のこうした要求が、王詩琅、そして葉榮鐘らから学んだ知識を背景とし、その精神を受け継いだものであつたことは言うまでもないであろう。

そして、このあとに康寧祥らによる『台湾政論』の創刊（康が台湾政論社社長、黄信介が発行人、張俊宏が総編輯）があつた（七五年八月創刊）。冒頭に触れたように、康寧祥の要請で葉榮鐘は、創刊号、第三期、第五期と三篇の文章を寄せている。日記の記述からは、葉榮鐘が、この戦後初めての本省人中心で編集発行される政論誌において抗日運動史が取り上げられることを喜んでいたこと、そしておそらくはこのような雑誌が発行されることそのものにもいささかの興奮を感じていたことが察せられる。雑誌は発行されると雑誌社から郵送されるか、あるいはついでがあれば康寧祥が自ら持参したが、葉榮鐘はその他にも町の書店や屋台からも買い求めて、知友に貸して閲読を進めた

り、読ませたいところ切り取って在米の子女に送ったりした。また、中央書局において五〇冊（おそらく第二期）が一日で十数冊を残すのみになったと張耀錡から聞いてわざわざ日記に記している（七五年九月二二日の条「全集六下：108」）。だが、それもつかの間、『台湾政論』は、二月には第五期で発禁処分とされてしまったのであった。

その後、台湾の政治・思想状況は、七〇年代末の内外複合する危機（中壠事件、対米断交、美麗島事件など）を経て一変する。だが、葉榮鐘はその様相を見ることはなかった。一九七八年一月二日永眠。

結びに代えて

以上、一九三〇年代に心に萌したその「述史」の志を、葉榮鐘が戦後の一九六〇年代後半から七〇年代にかけてどのように果たしてきたかを、不十分ながら跡づけることができた。

それを基礎に、「どのように」を「なぜ」に置き換えることもある程度可能だろう。なぜ戦後世代でもない葉榮鐘が七〇年代の「現実回帰」の思潮のなかに姿を現すのか。それは、端的に言えば『台湾民族運動史』が注目されたからである。では何故葉榮鐘は『台湾民族運動史』を書くことになったのか。それは、直接には蔡培火、呉三連などが

楊肇嘉の回憶録の記述に反発したためである。では、なぜ葉榮鐘が著者としてそこに呼び出されたのか。葉榮鐘はかつての抗日運動右派＝台湾土着地主資産階級民族派の「文胆」だったからである。林獻堂亡き後、その「文胆」の「公式」の役割は、数年をおいて世を去っていくかつての先輩同志の哀悼文集を編輯・作成することであった。葉榮鐘の手になるこうした哀悼文集として、前記の『林獻堂先生紀念集』の他に『羅萬俾哀榮錄』『肇老（楊肇嘉）榮哀錄』がある。李南衡編『台湾人物群像』に収める諸篇もまた、去っていった先輩・友人を哀悼し記憶に留めようとする営為であったことは言うまでもない。

そして、何よりも葉榮鐘の「述史」の志が不可欠であったと言える。『林獻堂先生紀念集』編纂が、戦後においてその「述史」の志を固めさせる契機になったと考えられるように、葉榮鐘の「文胆」としての役割は、「述史」の営為と重なるものではあった。したがって、前述のように民族運動史の著作者名の記載をめぐる葉榮鐘は一旦蔡培火との絶交書まで書いているが、台湾土着地主資産階級民族派のネットワークと決裂する行動は結局取らなかつた。葉榮鐘にしてみれば、彼が参与した抗日民族運動史の（右派の）潮流の名譽は守られねばならなかつたということであろうか。しかし、これまでに行論が示してきたように、晩年の葉榮鐘はもはや単に「文胆」であるだけではなかつた

のである。

最後に、一九八〇年代に入つてのことである。台湾史研究家の呉密察教授は、当時康寧祥の雑誌編集をサポートする若手学者の一人だったが、蔡培火の死（一九八三年一月四日）が報じられた後の事として、次のように回想している。

當時康寧祥は少數對於台灣政治前輩有關心的人，他參加了這些人的追思會之後，經常就會打個電話給我…密察，又一個死了，你幫他寫一篇吧。我就這樣在黨外雜誌寫了幾篇「我流」的追悼文。

抗日運動の先人の逝去の後に関連する文章を世に出すことで彼らを記念し記憶を伝えるというやり方も、美麗島事件後の「党外の復活」とともに、党外雑誌の中に継承された。八〇年代後半の台湾史研究隆盛に先立つて、これも葉榮鐘が残したものの一つであったといえるだろう。

注

〈1〉 陳少廷「林獻堂先生與「祖國事件」——兼論台灣知識分子抗日運動的歷史意義」『大學雜誌』第四三期、一九七一年七月、四一八頁。「七七事變與抗日運動」と題する特集の筆頭論文であった。その参考文献の中に、葉榮鐘編著の『林獻堂先生年譜』と『自立晚報』掲載の「日抛時代台

湾政治社会運動史」が挙げられている。

〈2〉 『台湾政論』掲載の三篇。葉榮鐘「台湾民族運動的鋪路人蔡惠如」（創刊号、一九七五年八月）、凡夫の筆名による「台湾民族詩人林幼春」（第三期、同年一〇月）、凡夫「革命家蔣渭水」（第五期、同年一二月）。

〈3〉 同時期の葉榮鐘に関しては、台湾文学研究者廖振富の一連の研究があるが、彼の焦点は散文家、古典詩作者としての葉榮鐘にある。廖振富[2004]、同[2006]、同[2007]など。

〈4〉 例えば、葉榮鐘晩年の文筆活動を検討するだけでも、王詩琅とその周辺を視野に入れることが不可欠であるが、現時点では十分にできていない。

〈5〉 この他、「台湾民族運動史年表」（一九七二年一月一八日林莊生宛書簡「全集六下：1205」と「林獻堂傳」（一九七二年二月四日日記「同前：717」）の意欲を示している。後者は書かれていない。前者は、実際に着手され、『台湾民族運動史』執筆の際に台湾部分が作成され、その後「中国（大陸）」「日本」「国際」の部分が付け加えられた。生前の出版はかなわず、『葉榮鐘全集 三 日抛下台湾大事年表』（台中：星晨出版、二〇〇〇年）として刊行された。

〈6〉 葉榮鐘は一八歳から詩作を初め、その後の六〇年間で六百首あまりの旧体詩を残している。それらは、まず莊幼岳の校訂により一九七九年『少奇吟草』としてまとめられ親族・友人に配布され、ついで『葉榮鐘全集 五』に収めるにあたって七九年当時政治的理由で収録されなかった六

一年作の「哀哀美麗島」、七八年作の「無題」が収録された。途絶えることなく作られたこれらの詩作は、重要な伝記資料であるばかりではなく、「一篇の詩史」であるともいえる〔洪銘水 2000: 44〕。したがって、葉榮鐘の「述史」を検討しようとする筆者の研究においても無視できないものであるが、筆者の能力では系統的な検討はできず、ごく部分的な言及しかできないことを、残念ながらここで告白せざるを得ない。

〈7〉 <http://pesto.lib.nthu.edu.tw/newZ/ugl/x-system.jsp?mn=729> 二〇〇九年十一月一日五日閲覧（中文訳は「全集六上：133」）。

〈8〉 林春蘭は楊雲萍帰台を一九三二年としているが、後に許雪姬が考証の上これを一九三三年としているのでこれに従った〔許雪姬 2006: 122-123〕。

〈9〉 例えば、三九年二月九日の条には次のような述懐がある。「河合（栄次郎）氏編の『学生と読書』を読む。読書の回顧を書いた諸家の文章から期待した程の結果は得られなかったが、その一人一人が何れも中学、高校時代に多くの書物を読み得たことを羨ましく思った。……過去の不勉強が残念で堪らなご」（<http://pesto.lib.nthu.edu.tw/newX/ug1/o-ig-9.jsp> 二〇〇九年十一月一日五日閲覧、中文訳は「全集六上：136」）。さらに、戦後は、親友莊垂勝の長男林莊生への書簡（一九六八年四月二七日付）で、「若い時から生活を自主的に設計できず、また職業（新聞記者など）の関係から知識は雑学に傾き」「この歳になっても真に自分

属する専門の学問が無い」と述懐している〔林莊生 1992: 241〕。

〈10〉 ともに矢内原忠雄が自宅で行った聖書講義に連なったことのある陳茂源（一九〇三—一九九六）の証言がある。一九二九年秋のことである。「その時『東京小石川楊肇嘉宅での新民会の日曜懇談会の途中で席を立つ葉榮鐘に矢内原宅に聖書講義を受けに行くと聞いて』私はハツとして反射的に自分も一緒につれていってくれと『葉榮鐘に』せがんで随いていったのである。当夜の大森八景坂上の御宅の光景は終生忘れることが出来ない。私は本当に夢見る者のごとく、孤灯のもとにただただ一人の異郷の青年を相手に「ルカ伝」の御講義をしておられる先生の真剣なお姿を目撃した。直感的に私はそれまで暗中模索していたものに突き当たったことを感じた。……その晩講義終了後、私は職務「三年から松本で判事任官」に因る欠席の可能性あることを慮りつつ、先生から爾後参加のお許しを受けた。葉氏はその後まもなく帰台せざるをえなくなり、銀座資生堂における二人だけの饞別の宴に涙ながらヤット心から尊敬できる良師をえて、いよいよこれから本当の仕上げをして貰えるのだと喜んだのも、つかのま、父母兄弟なく天涯孤独なるが故に、他動的に帰台せざるをえなくなった自分の不遇を訴えた情景はなお昨日のごとくである」〔陳茂源 1965: 110-111〕。

〈11〉 一九〇五年彰化銀行として設立。戦後四七年彰化商業銀行として改組、林猷堂が初代董事長となる。林猷堂の東

京「亡命」後、次男の林猶龍（一九〇二—一九五五）がその後を襲うが父林猷堂に先立ち死去、羅萬偉（一八九八—一九六三）がこれを継いだ。羅は東京で中日合作策進委員会に出席中に脳血栓で倒れ客死した。葉榮鐘は、羅萬偉董事長までは人事部門で重く用いられたが、張聘三が後任董事長に任じるとそうではなくなつたようである（葉光南氏の筆者への直話〈二〇〇九年八月四日〉および葉榮鐘日記関連記述から）。

〈12〉 これより以前、『台湾文獻』五三年六月号に「凡夫」の筆名で例外的に「記辜耀翁」を書いている。

〈13〉 一九二四年明治大学を卒業し朝鮮半島や北京、上海を歴遊して帰台した莊遂性は、台湾文化協会の文化講演会に積極的に参加する傍ら、翌年文化事業を興そうと台中に中央俱樂部を設立した。文化交流施設としてレストランと宿舍を併設するクラブと書店の経営を目指すものであったが、実際に実現したのは後者のみで、それが中央書局であった〔葉榮鐘 1985 (1962): 154-156〕。葉榮鐘「退休生涯」期の日記を見ると、当時の経営者は張耀錡で、同書局は、葉榮鐘の書籍購入の重要なパイプの一つであるとともに、台中知識人が頻繁に顔を出すサロンの機能も果たしていたことがわかる。

〈14〉 この点は『彰化銀行六十年史』（全集八に「近代台湾金融經濟發展史」として収録）執筆についても同様であったと言えよう。

〈15〉 『台湾民族運動史』は八〇年代に入り一九二〇年代抗

日運動についての葉榮鐘が残した「見証」との評価が出てくる〔「紀念葉榮鐘」『暖流』編按 1982: 42〕が、葉榮鐘の原稿に忠実に刊行された『葉榮鐘全集 一 日坳下台湾政治社会運動史』は、『自立晚報』連載に基づいて刊行された流布本よりも、明示的に著者実見として記した部分がいっそう目立つ。両者のテキストの比較については、尹章義 [2000] を参照のこと。

〈16〉 いずれも『台湾人物群像』（一九八五年刊）に収める。

〈17〉 『四書読本』には多くの版本があり葉榮鐘がこの時読んだものがどれか不明。家族が清華大学図書館に寄贈した蔵書の目録にも同じ書名なし。

〈18〉 池島信平編『歴史よもやま話』日本篇上、同下（文藝春秋社、一九六六年）であろうと思われる。

〈19〉 井上清『日本の歴史』岩波新書、一九六三—一九六六年刊。日記の記載によれば、葉榮鐘が戦後に読んだ日本書は、当時台北にあった三省堂書店で購入する他、東京に住んでいた娘婿の張東亮に頼んで取り寄せていた。

〈20〉 九月二日台北で王詩琅とともに黃得時を訪れ借り出している（日記「全集六上：328」）。同年五月に高日文から借りた若干の資料の書き写しなどをしたが一か月ほどしか借りられなかった模様である〔同前：300-309〕。戦後の台湾知識人が二〇年代抗日運動史の基本資料であるこの『台湾社会運動史』をどのような状況で所蔵ないし閲覧できたのかも、興味深いポストコロニアルの文化現象の一つであろう。

〈21〉葉榮鐘は戦前の一九二九〜三〇年にかけて無教会派のキリスト者でもある矢内原忠雄の自宅で聖書講義に連なったことがある。その時は入信はしなかった。長女の重篤が伝えられていた六七年八月三〇日帰台の際に矢内原から饒別に贈られた内村鑑三著『求安録』を読み神の庇護を願ったという記述が日記に現れ（八月二十七日「全集六上：323」）、九月一四日の日記には、夕食後イエスを信ずるに至ったことを家族に告げたとの記述が現る「同前：327」。一週間後台北に赴いた際、蔡培火にも語っている「葉榮鐘 1979: 205」。

〈22〉家族の動向は、日記（全集六）と年表（全集九）の記述による。

〈23〉ただし、筆者の手元の「初版」本では、全偶数頁欄外に記載されている書名は『台湾近代民族運動史』となっている。

〈24〉葉榮鐘の手になる「序」の原稿では、「序」の日付は「中華民國六〇年六月一七日」となっている（葉榮鐘「原序」【全集一：674】）が、後述のように最後に蔡培火の手が入った『台湾民族運動史』初版の「序」では、「中華民國六〇年六月 日」と日付が空白のままとなっている。「六月一七日」は一八九五年台湾総督府が台湾で正式に業務を開始した日であり、総督府はこれを「始政記念日」としたが、一九二〇年代東京に留学した台湾人青年の一部はこれを「恥政記念日」として排撃したこともあった。実際の「序」で日付が空白となった理由は不明であるが、葉榮

鐘が日付にこめた象徴的意義が消滅していることは確かである。

〈25〉葉榮鐘の主張は、「葉榮鐘著、蔡培火、林柏壽、陳逢源、吳三連監修」であった（葉榮鐘「原序」【全集一：674】）。蔡培火は自立晚報が四万元で葉榮鐘から（著作権）を買い取るかたちを提案したこともあったが、葉榮鐘は拒否した（葉光南宛書簡、七一年一月一五日【全集九：131】）。

〈26〉葉芸芸氏の筆者への電子メール、二〇〇九年一月二四日。

〈27〉<http://pesto.lib.nhu.edu.tw/newX/ug1/0-ug-9.jsp> 1100 九年一月一五日閲覧（中文訳は【全集六上：269】）。

〈28〉一九七一年三月二四日葉光南への書簡では「我現在計劃用日文寫一本《日本統治下之台湾》。前在自立晚報發表的《日據時期台灣政治社會運動史》係站在台灣人的立場、寫台灣反抗日本爭取民權的事實。現在計劃中的書擬換一個角度、寫日本的支配者如何虐待台人、搾取台人的膏血的事實。不過日文光復後除通信以外幾乎沒有機會執筆、是否應付得來、不無疑問」【全集九：119】と述べている。一年後の林莊生への手紙（一九七二年三月二五日）では、原稿が完成したら東京に送り、岩波書店などでの出版を目指す、と言っている「林莊生 1992: 245」が、原稿が執筆されることはなかった。

〈29〉『台湾民族運動史』の「凡例」の「三」には、「台湾近代民族運動史係資產階級與知識分子領導。是故左翼的抗日

運動與階級運動均不在叙述之列」とある。これには著者葉榮鐘と蔡培火・吳三連らの後援者かつ校閲者であった人物が抗日右派に属する人物であったこと、そして何よりも長期戒厳令下での執筆・出版であったことによるものと思われる。『全集一』に付されている尹章義による葉榮鐘の原稿との比較でも、左派関係の記述の多くが公表時に削られていることが指摘されている〔尹章義 2000: 662-666〕。

〈30〉一九七一年に最初に「自立晚報叢書」として刷られたのが「初版」であるが、同年中に「一版」が刷られ、一九八二年「再版」、一九八三年「三版」が出されている。この間、台北の学海出版社という出版社からも海賊版らしきものが出版されている。自立晚報社のものは、一九八七年の「四版」から「本土系列二一」とされ、「五版」が増刷された。「初版」の後に「一版」が刷られているから、これが実際の「六刷」であろう。その後増刷回数という言葉が変更された模様で、九三年刊のものは「一版七刷」と記載されている。そして、すでに示しているように、葉榮鐘の当初の原稿に基づいて『日抛下台湾政治社会運動史』と解題されたものが、『葉榮鐘全集一』として二〇〇〇年に刊行されている。

〈31〉日本からはまず池田敏雄（戦前『民俗台湾』編集者）が、おそらくは王詩琅の紹介であろう、長い手紙をよこした（七二年一月一二日）。『台湾民族運動史』を評価する内容であったのであろう、「早上接東京池田敏雄一封装信使余一天興奮不已」とその日の日記に記している。そして戴

國輝が来た（同年八月一三日）。その後、戴、池田らが東京で作った台湾史研究グループの日本人大学院生が次から次へと訪ねてきた。筆者もその一人であった（日記、七三年三月六日の条）。後の台湾近代史研究会と葉榮鐘の交流に関しては、当時葉榮鐘との往来が最も多かった台湾文学史研究家の河原功氏（当時成蹊大学大学院生）などの回想等を待つて再度検討したい。

〈32〉「好評」というわけではないが、七二年二月一日の日記には、青年を伴って自宅に來訪した作家吳濁流が、書名を「台湾民族、運動史」と読む人もいると告げたとの記述がある〔全集六下：720〕。筆者も、筆者と同世代の台湾人友人から最初に同書の書名を目にしたときそのように読んだとの話を聞いたことがある。また、これも「好評」の例というわけではないが、台湾大学図書館蔵の「專藏文庫孫運璿」には、本書が一冊入っている。後の国民党政府行政院長も本書に関心を持ったのであろうか。

〈33〉少し遅れて『夏潮』主編の蘇慶黎も葉榮鐘を訪ねて寄稿を乞うている（七六年八月八日〔全集六下：1092〕）。葉芸芸によれば、李南衡が同伴したとのことである。この頃から葉の健康は優れず、李南衡に約束した頼和についての文章も未完に終わり、『夏潮』に寄稿することはなかった〔葉芸芸 2006: 343-344〕。

〈34〉日記七七年一月五日の条には「三時許、林瑞明者持楊貴君名片來訪、稍後又有同伴吳姓青年來会谈移時、將近六時辞去」とある。この「同伴吳姓青年」について、林瑞明

教授は筆者への電子メールで「幾可断定吳姓青年是常以汽車載楊逵(貴)出入的調查局特務!當天,亦是尾隨我而來,想探知與葉榮鐘談些什麼。後來我警覺到了,提醒楊逵,才不再接受他載出載入」と指摘している。葉榮鐘がこれを察知していたかはわからないが、旧知に有らざる人々と会うにはこのような政治的危険があった。そのことは言うまでもなく葉榮鐘の世代の知識人は皮膚感覚として承知していたであろう。その他の政治関係の言及とともに新たに出会った青年たちの記述もごく簡単なものとどまった理由の一つであろう。

〈35〉李南衡は二度の葉榮鐘宅訪問を、「葉榮鐘先生不原諒我」[李南衡 1983: 47-50]と回想している。

〈36〉葉榮鐘日記にはこの他『大学雜誌』で活躍し陳少廷の名もしばしば登場する。『大学雜誌』は月号陳から贈られてきていた。七三年一月三日には義弟施維堯に伴われて葉宅を訪問している。その後も面会往来があるが、具体的内容はなお検討が必要である。

〈37〉葉榮鐘と戦後世代、さらには同時代の日本の学界とのつながりのきつかけをもたらしたのは、間違ひなく王詩琅である。二人がどのように知り合ったのか定かではないが、葉芸芸氏は、日本植民地統治期にすでに知り合いはあり、密接な往来をするようになったのは、王詩琅が台湾省文献委員会(所在地台中)に勤めるようになってから(一九六一年同編纂組長に就任[葉瓊霞 1991: 99])であらう、としていいる(筆者への電子メール、二〇〇九年一月

二四日)。

〈38〉注(2)参照。

〈39〉吳密察氏の筆者への電子メール、二〇〇九年九月一日。このようにして吳教授が書いた追悼文は、蔡培火、陳逢源、葉榮鐘についての三篇がある(同氏の筆者への電子メール、二〇〇九年一月三〇日)。こうした活動にかかわった当時の若手執筆者・編集者は吳氏ばかりではない。吳氏を含めそうした方々が回憶録を書かれることを強く希望する。

参考文献

- 尹章義 2000 「捨我其誰的史家和客觀環境手的互動——《手稿本日拋下台湾政治社会運動史和報刊本、单行本》台湾民族運動史》的比較研究」『葉榮鐘全集一』台中・星晨出版、二九一—三一頁
- 行政院研究二二八事件小組 1992 『二二八事件研究報告』台北・時報出版社
- 洪炎秋 1979 「悼念葉榮鐘先生」『台灣文藝』六二號(三月)、二二九—二四二頁
- 洪銘水 2000 『少奇吟草』跨越世代的見證』『葉榮鐘全集五』台中・星晨出版、三九—七二頁
- 蕭阿勳 2008 『回歸現實——台灣一九七〇年代的戰後世代與文化政治變遷』台北・中央研究院社会学研究所
- 『暖流』編按 1982 「紀念葉榮鐘」『暖流』第二卷第一期

(七月)、四二頁

陳少廷 1971 「林獻堂先生與『祖國事件』——兼論台灣知識分子抗日運動的歷史意義」『大學雜誌』第四三期(七月)、四一八頁

陳茂源 1965 「大森の家庭集會の頃」南原茂他編『矢内原忠雄——信仰・學問・生涯』岩波書店、一〇八—一一四頁

葉榮鐘 1979 「藜兒最後的信」蘇薌雨・葉榮鐘・洪炎秋『三友集』台中：中央書局、一八五—二一六頁

葉榮鐘 1985 (1962) 「台灣的文化戰士——莊遂性」葉榮鐘著、李南衡編『台灣人物群像』台北：帕米爾書店、一四九—一五九頁

葉瓊霞 1991 「王詩琅研究」成功大學歷史語言研究所、碩士論文

葉芸芸 2000 「編輯報告」『葉榮鐘全集一』台中：星晨出版、九一—一四頁

葉芸芸 2006 『余生猶懷一寸心』台北：印刻出版

葉芸芸・葉光南・葉光蔚編撰 2002 「葉榮鐘年表」『葉榮鐘全集九』台中：星晨出版、二九—一八一頁

李南衡 1983 「葉榮鐘先生不原諒我」『暖流』第一卷第一期(七月)、四七一—五〇頁

廖振富 2004 「葉榮鐘「少奇吟草」所反映的師友情誼與現實關懷」『國文學誌』第八期(六月)、三五—七六頁

廖振富 2006 「論葉榮鐘詩作手稿及其相關資料之研究價值」『臺灣文學學報』第九期(二月)、一三一—四三頁

廖振富 2007 「論葉榮鐘六〇年代散文創作及其文學史意義」

義「東海大學中文系編輯『苦悶與蛻變——六〇、七〇年代台灣文學與社會』六一—一六六頁

林春蘭 1995 「楊雲萍的文化活動及其精神歷程」成功大學歷史語言研究所、碩士論文、<http://ws.twi.ncku.edu.tw/hak-chia/lin-chhun-lan/sek-su.htm> 二〇〇九年一月二四日閱覽

林莊生 1992 「懷樹又懷人——我的父親莊垂勝、他的朋友及那個時代」台北：自立晚報社

若林正文 2008 『台灣的政治——中華民國台灣化の戦後史』東京大學出版會

〔付記〕 小稿は、中文で発表した筆者の「葉榮鐘的『述史』」之志——晩年書写活動試論」(『台灣史研究』第一七卷四期、中央研究院台灣史研究所、二〇一〇年二月、八一—一二頁)の日本語版であるが、若干の加筆がある。また、小稿作成の過程では、資料収集、インタビュー、問い合わせへの返答、調査旅行のサポートなどで多くの方々の支援をいただいた。以下にその方々の御名前を記して謝意を表する(順不同、敬称略)。葉芸芸、葉光南、施織織、陳培豊、柳書琴、吳密察、林瑞明、康寧祥、陳清喜、葉國興、方昇茂、張耀錡、洪銘水。